

新 津 古 墳 群

福岡県京都郡苅田町所在古墳群の調査

1 9 7 6

苅 田 町 教 育 委 員 会

序

本書は植木園造成に伴って、苅田町教育委員会が実施した新津古墳群の発掘調査報告書であります。

今回の調査にあたって、福岡県教育委員会をはじめ地元有志の方々からも、多大の御協力を賜わり、無事初期の目的を達成することが出来ました。

ここに深く感謝の意を表するとともに、この報告書を埋蔵文化財の保護、保存等に御活用いただければ幸甚に存じます。

昭和 51 年 3 月 1 日

福岡県京都郡苅田町教育委員会

教育長 有 松 正 男

例 言

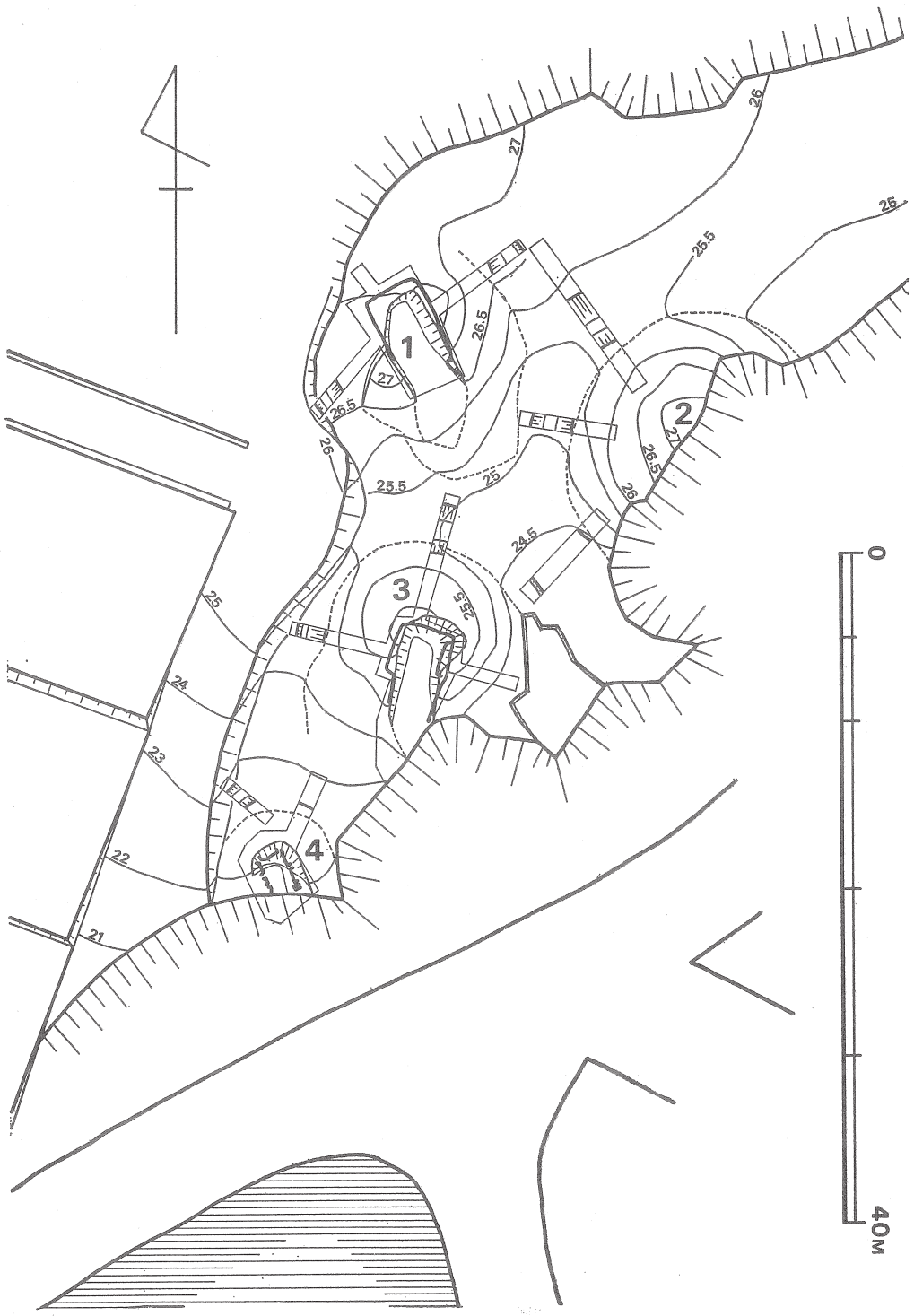
1. 本書は、個人の植木用畑地造成工事に関連して、昭和50年度に実施した新津古墳群緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は国・県費の補助を受け菟田町教育委員会が実施した。
発掘調査費は、国 50%、県 25%、菟田町 25%の率で負担し、総計100万円の予算で実施した。
3. 本書は次の内容である。

目 次

1. はじめに	1
2. 古墳の位置	1
3. 遺構・遺物の概要	2
(1) 1 号 墳	2
(2) 2 号 墳	4
(3) 3 号 墳	5
(4) 4 号 墳	9



第1図 新津古墳群及び周辺の古墳分布図 1：石塚山古墳 2：番塚古墳 3：御所山古墳
 4：百合ヶ丘古墳群 5：猪熊古墳群 6：獺師ヶ谷古墳群



第2図 新津古墳群地形測量図

1. はじめに

新津古墳群緊急発掘調査の端緒となったのは地権者原浩の植木用畑地造成計画による。

造成地内には、かなりの破壊を受けた円墳4基が遺存していて、造成計画を察知したときはすでに造成の準備が全て完了し、着手するばかりの時点であった。

したがって、荇田町教育委員会は、文化庁、県教育委員会と連絡をとり、国・県費の補助を受け、昭和50年11月1日から11月20日の間に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査関係者は次のとおりである。

荇田町教育委員会

教務課	課長	大石積男
	係長	坂岡哲吉
	主査	林田浩嗣
	〃	井関寛之
	〃	緒方克子
福岡県教育委員会文化課	技術主査	宮小路賀宏
調査補助員		村上久和
荇田町文化財調査委員会	委員長	広瀬正美知
	委員	植山荒二郎
	〃	宮崎亨
	〃	早田茂

なお、調査にあたっては、川中幸生・野口一・植山チエ子・竹並遺跡調査会赤崎敏男・九州歴史資料館技師森田勉の各氏に種々お世話御協力をいただいた。記して感謝申しあげる次第である。

2. 古墳の位置

鹿兒島本線小倉駅から日豊本線に乗りかえ小倉市街地をすぎると、企救半島と福智山々塊にはさまれた平野が開ける。このあたりから車窓の左には周防灘が眺められ、やがて「おぼせ駅

」に汽車は止まる。新津古墳群は、このおばせ駅から徒歩で約7分の位置にある。

遺跡は、洪積台地に立地し、周辺は住宅地として近年開発が進行している。

遺跡は、福岡県京都郡苅田町大字新津字石走り1519—1番地に所在する。高城山から東南に流れる丘陵先端部の北東に周防灘を望む景勝の地である。

当苅田町内には、多数の古墳が散在する。最も著名なものは、17面の三角縁神獸鏡を出土した石塚山古墳（前方後円墳）がある。また、前方後円墳としては、番塚古墳や今も水を湛えた御所山古墳がある。この3基の前方後円墳は特に優秀である。新津古墳群の周囲には、百合ヶ丘古墳群・猪熊古墳群・獺師ヶ谷古墳などがある。これらの古墳の分布状態を見ると、北から南へと時代が新しくなる傾向が観察され、小波瀬川が形成した平野が、古墳時代後期における生活基盤となったことがわかる。

なお、苅田町には、肝等屯倉が置かれていたことが推定されており、このことは、前記前方後円墳の所在からも十分首肯である。

3. 遺構・遺物の概要

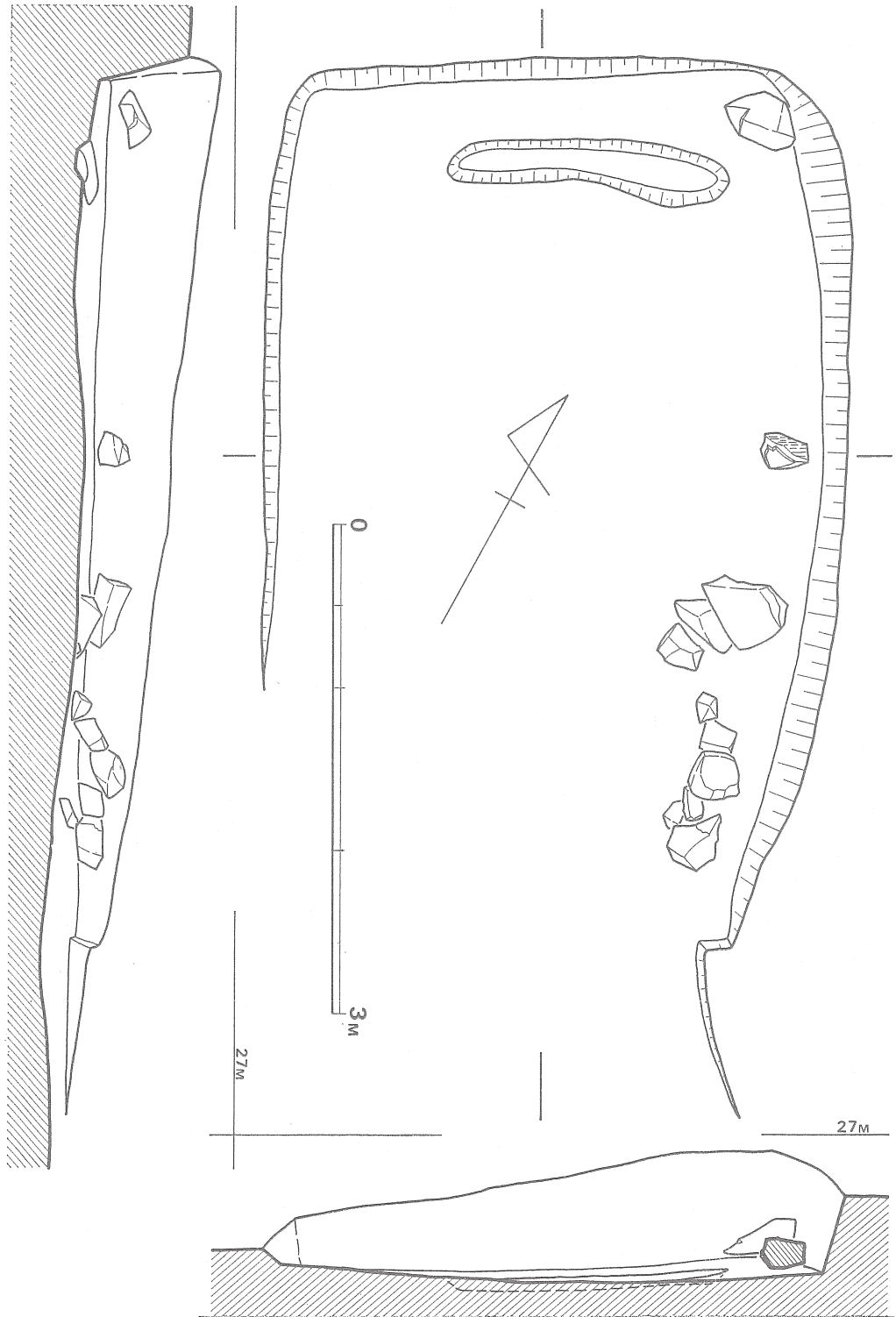
調査対象区域には、主体部を破壊された円墳3基と墳丘の3分の2を削平された円墳1基が遺存している。

古墳は、西から東に流れる丘陵の南斜面に立地し、尾根線に1・2号墳が東西に並び、南に3・4号墳と下がる。遺跡の西は概に宅地造成が行なわれている。東には県道が通過している。西の団地造成に当っては、事前に分布調査が実施されており、古墳等の遺跡の確認はなかった。県道より東には、円墳1基が遺存していることから、かつて県道建設によって削平された古墳もあったかと思われるが、県道建設が相当以前のことであり、当時の状況はわからない。当該調査区を含めた5基以上からなる古墳群が形成されていたものと考えられる。

(1) 1号墳

墳丘は石材抜き取りによって大きく陥没している。残った墳丘も低い。なお、北西側も削平を受けている。陥没穴の状態から南東に開口する横穴式石室と推定されたことから、これに直角にトレンチを設定した。盛土は薄く50cm程度である。墳丘の裾部には溝がめぐらされている。溝は北東側で巾2.3m、南西側では1.7mである。溝までの墳丘の径は11.5mを測る。

主体部は、石室を架構するために掘られた壙と側壁腰石を設置するための根締め石数個が検出された。壙は長方形を呈し、長約5.4m、中心部巾3.3mを測る。奥壁の床面には、奥壁石材のスタンプが残っている。壙は八字形に開口している。石室は、残された根締め石の配置及



第3回 第1号墳主体部遺構実測図

び壙の状態から複室になる可能性が考えられる。

遺物（第8図5・14、図版3）は主体部が完全に破壊攪乱を受けていることから、極めて少量であった。須恵器では大甕・提瓶・壺等の小片、土師器では高杯の小片、耳環が発見された。実測図となるのは壺・提瓶・耳環である。14



第4図耳環(%)大

は口頸部破片で、復元口径25cm、残存高5cmを測る。内外ともにヨコナデされている。砂粒を若干含む黒灰色の焼きの硬い須恵器である。5は提瓶の口頸部破片である。口径7cm、残存高6.7cm。ゆるやかに開口し口唇部で内傾する。内外ともにヨコナデされた黒灰色の砂粒の多い硬質須恵器である。耳環（第4図）は銅芯金張りで外径2.4×2.3cm、断面径0.8×0.5cmと楕円である。

(2) 2号墳

当古墳群中最大のもので推定されるが、大半を削られている。墳丘裾部に3本のトレンチを設定して、大きさを確認する調査に止った。

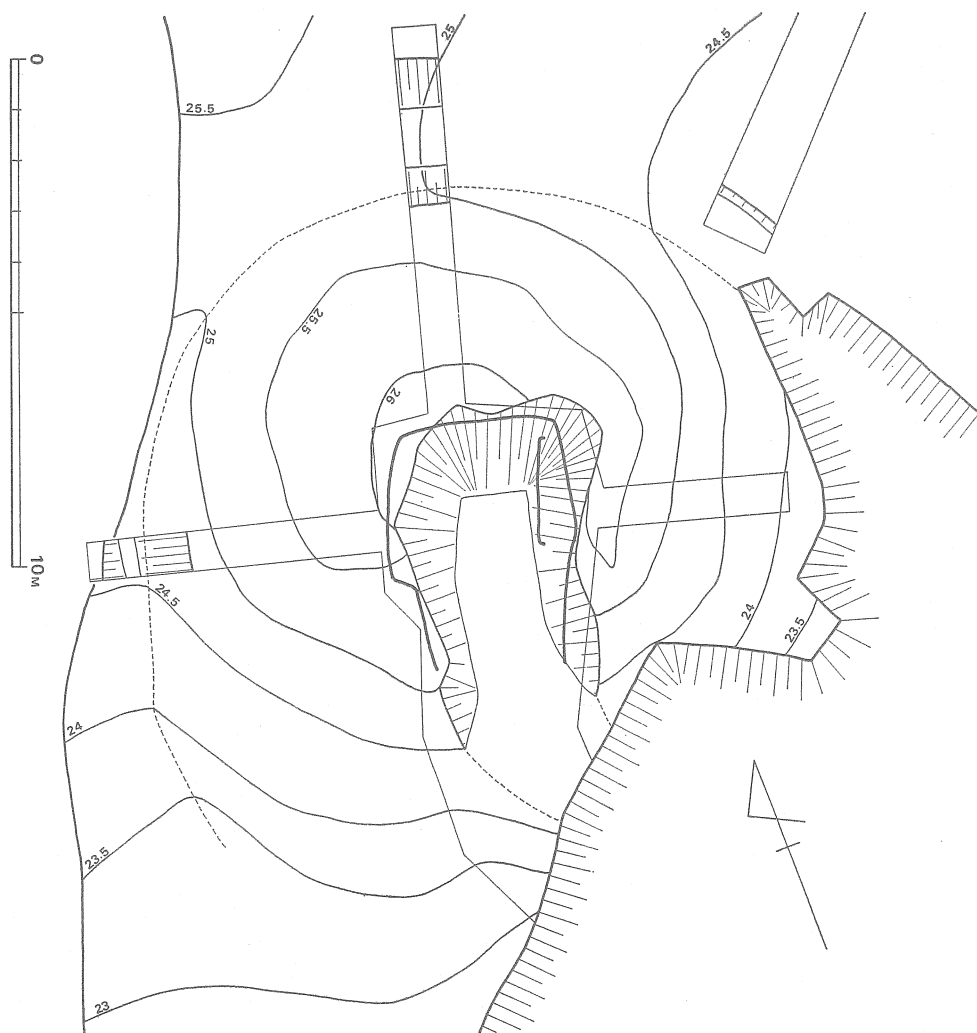
北2本のトレンチには、巾3.5mと2.5mの溝が発見されたが、南のトレンチにはない。したがって、丘尾切断状にめぐらされたものと考えられる。

遺物（第8図1・2・4・8・～10・13、図版3）は墳丘裾部及び溝内から発見された。1は杯蓋の破片である。復元径12.4cmのやゝ軟質の須恵器である。全体に丸味のある器形と思われる。口唇は丸くおさめられ、内外ともにヨコナデされている。8は甕である。ラップ状に反転開口する頸部に対し、口縁部は内湾気味に開く。口唇は丸くおさめられている。直線的に下がる肩部に対し、胴は丸く締める。胴には肩に接して径1.3cmの円形穿孔があり、この上下に沈線がめぐる。また、口縁部と頸部の接面に一条、頸部中央に一条の沈線がめぐらされている。孔より下は篋ケズリののちヨコナデされ、そのほかはヨコナデされている。軟質の灰色須恵器である。口径10.5cm、高さ12cm。10は脚付埴である。脚部は、三面上下に短冊形の窓を持つ。上下の窓の間には2条の沈線がめぐっている。裾部はゆるやかに開く。底径9.2cm。脚内側の窓上段部分にはシボリの痕跡が認められ、外の内外面はヨコナデされている。径5.2cmの埴部の口縁部は短く、口唇部は丸くおさめられる。肩の張りに反して胴・底部は丸い。肩に一条の沈線がめぐる。内外ともにヨコナデされている。脚付埴の総高は16.8cm。この脚付埴にもなうと考えられる蓋がある。径8.4cm、残存高2.8cmの破片で、口唇部に段を持つ。頂部に撮みを持つか不明である。埴部の肩に残された焼成時の変色が、この蓋の径に合う。暗灰色の硬質の焼成良好の須恵器である。4は脚付壺の脚部破片である。裾部は段を持ち、さらに一条の沈線をめぐらしている。底径12.4cm・残存高3.8cmである。内外ともヨコナデされたやや焼きの甘い須恵器である。9は甕の胴部破片である。底に近い部分と考えられ、厚いところで1.2cmを測る。内面には青海波文、外面は叩き文がある。焼きは硬く、外面は黒色で光沢がある。2は土師の高杯で、杯部の破片である。残存径10.6cm。器面は剝離が甚だしい。一条の沈線がわずかに認められる。13も土師高杯の脚部破片である。柱状部は太く中ぶくらみである。裾は

ゆるやかに開き、縁端は反転する。径14.3cm・外面はナデによる整形が施され、内面は篋ケズリされている。赤褐色の焼成良好の土師器である。

(3) 3号墳 (第5、6、7図)

4基の古墳中最も墳丘の残りのよい古墳であるが、やはり主体部は破壊されている。墳丘築造状態をみるためT字形にトレンチを設定した。墳丘は、まず地山を平坦に整形し、茶褐色土・黒褐色土・赤褐色土等の土を交互に積み重ねて墳丘を造るが、作業は大きく3段階に分けられる。それは石室架構との関連を示すものであろうか。最も残存状態の良い個所で1.7mの盛土が認められた。墳丘の径は約12.4mと考えられる。裾には溝が認められ、北側では巾2.8m、東側では1.7mを測った。主体部は、東側腰石一枚と石室を構築するための壙を検出した。

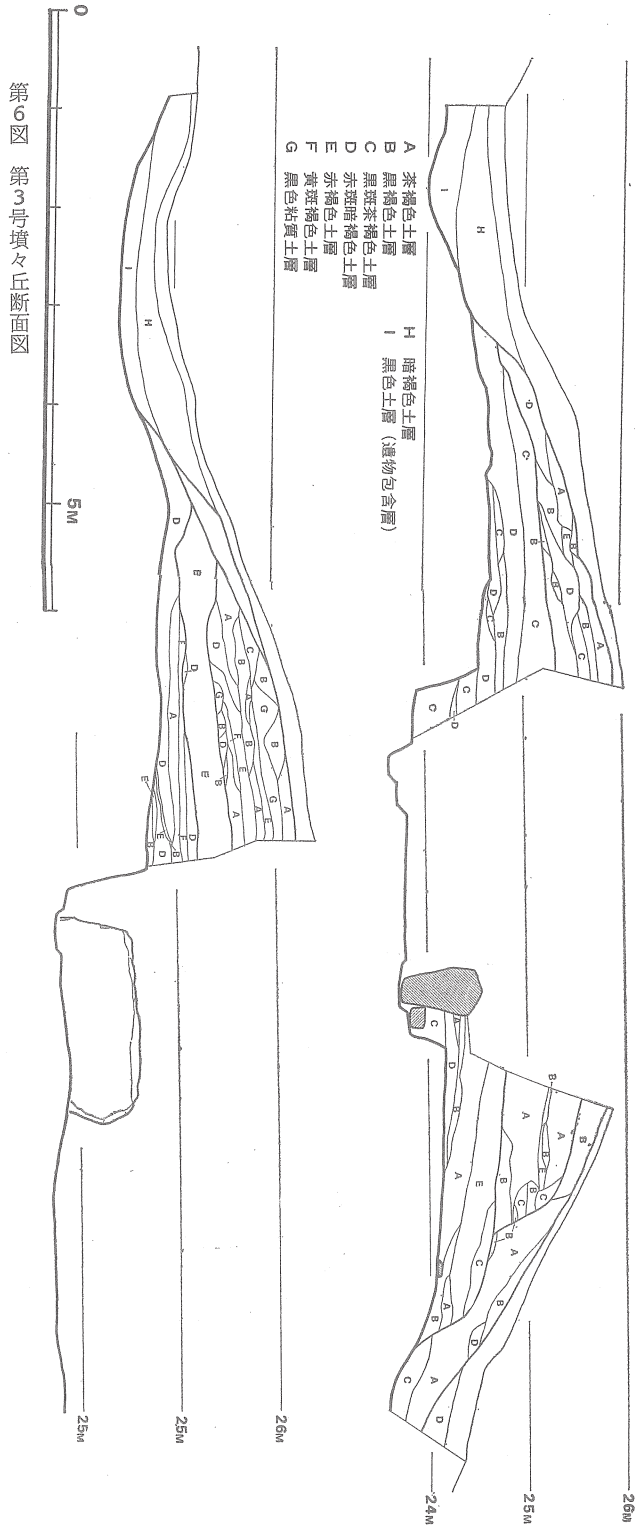


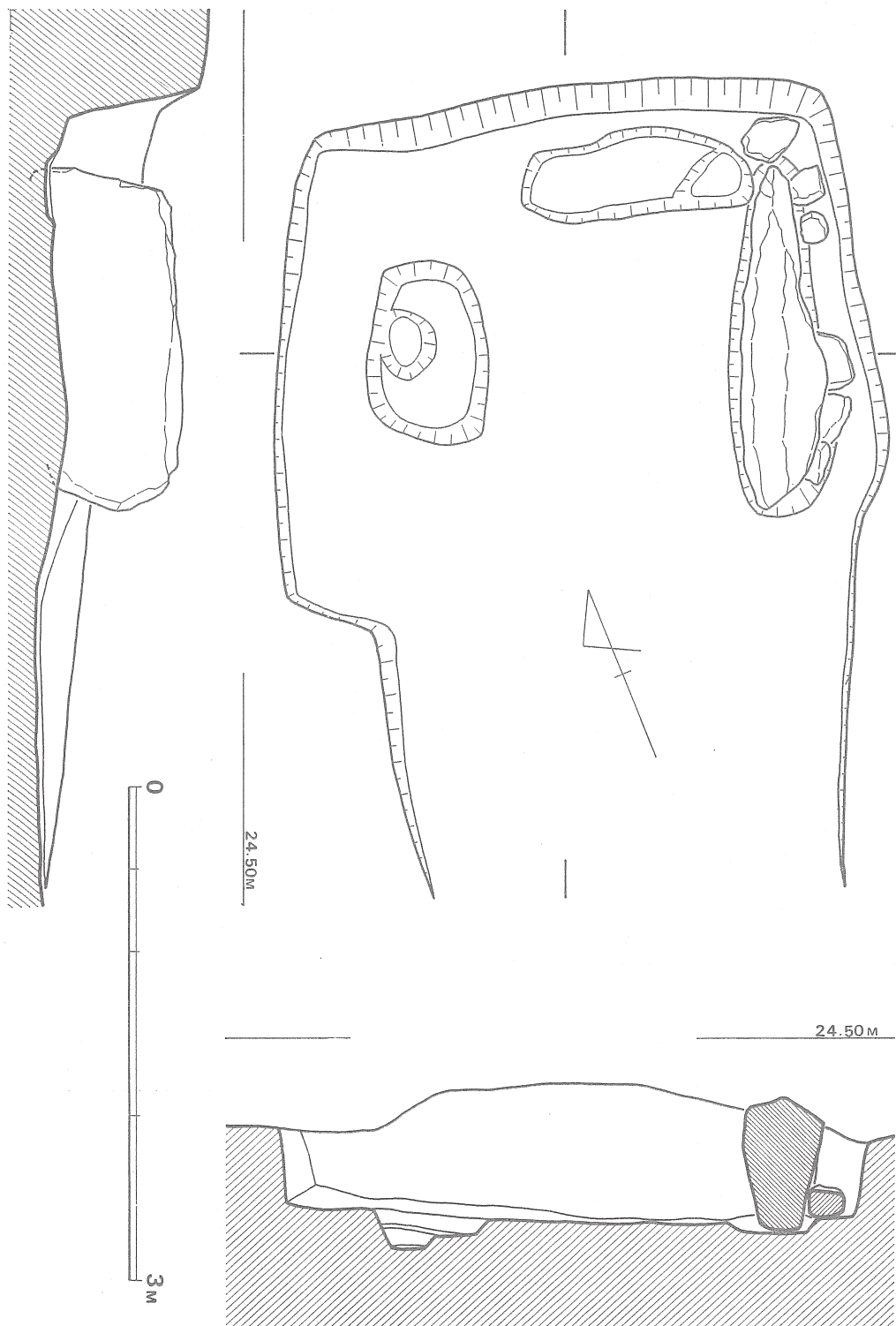
第5図 第3号墳々丘実測図

墳は不正長方形をなし、開口する南
 辺は自然消滅する。これは立地条件
 によるものである。奥壁部分で深さ
 80cm掘り込まれている。残された側
 壁石材は、長220cm・巾約50cm・高
 さ約85cmを数える。石材は片岩であ
 る。なお、奥壁及び西側壁部分には
 石材はないが、設置のための墳が認
 められる。石室は南南西に開口する
 横穴式石室で、単室であるか複室で
 あるか不明である。

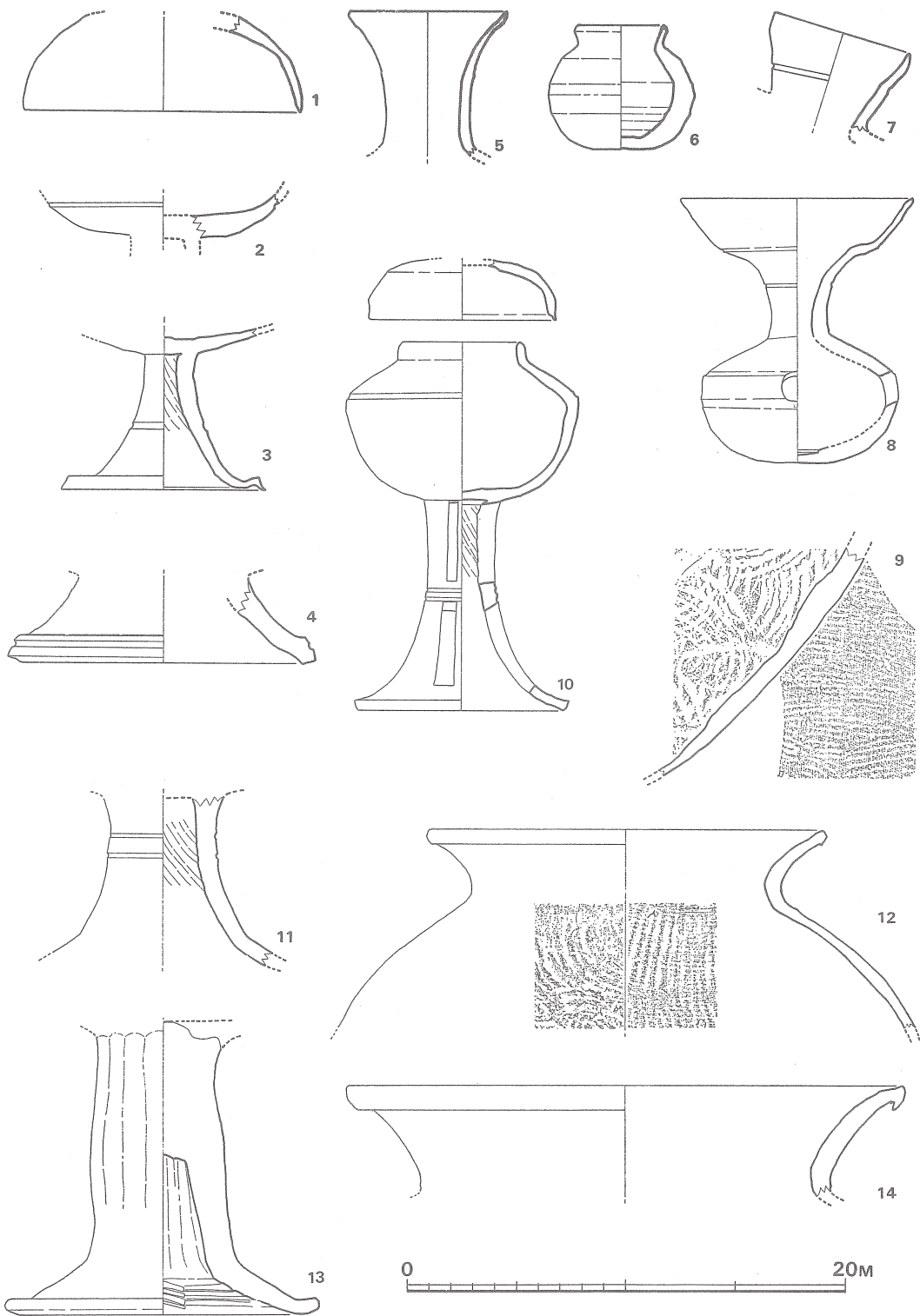
遺物（第8図3、6、7、11、12、
 図版3）は多くは溝から発見された
 3は高杯の破片である。脚は短く、
 縁端で反転している。底径9.2cm。
 脚中央に一条の沈線がめぐる。内面
 にはシボリが認められ、そのほかは
 ヨコナデされている。

砂粒を若干含む灰白色の硬い焼き
 の須恵器である。6は小型の罎であ
 る。胴は球状に丸く、口頸部は短く
 やや開く。口径4cm・高5.7cm・黒
 灰色の焼きの硬い須恵器で、胴は篋
 ケズリののちヨコナデされている。
 7は径6.3cmの平瓶口頸部破片であ
 る。一条の沈線が施されている。内
 外ともヨコナデされている。12は壺
 の破片である。復元口径17.6cm・残
 存高10cm・全体に薄手で、口頸部は
 カーブしながら外反し、口唇は丸く
 下端に稜を付ける。胴は内面に青海
 波文、外面には叩き文が認められる
 口頸部はヨコナデされている。11は
 土師高杯の脚部破片である。二条の





第7图 第3号墳主体部遺構実測図



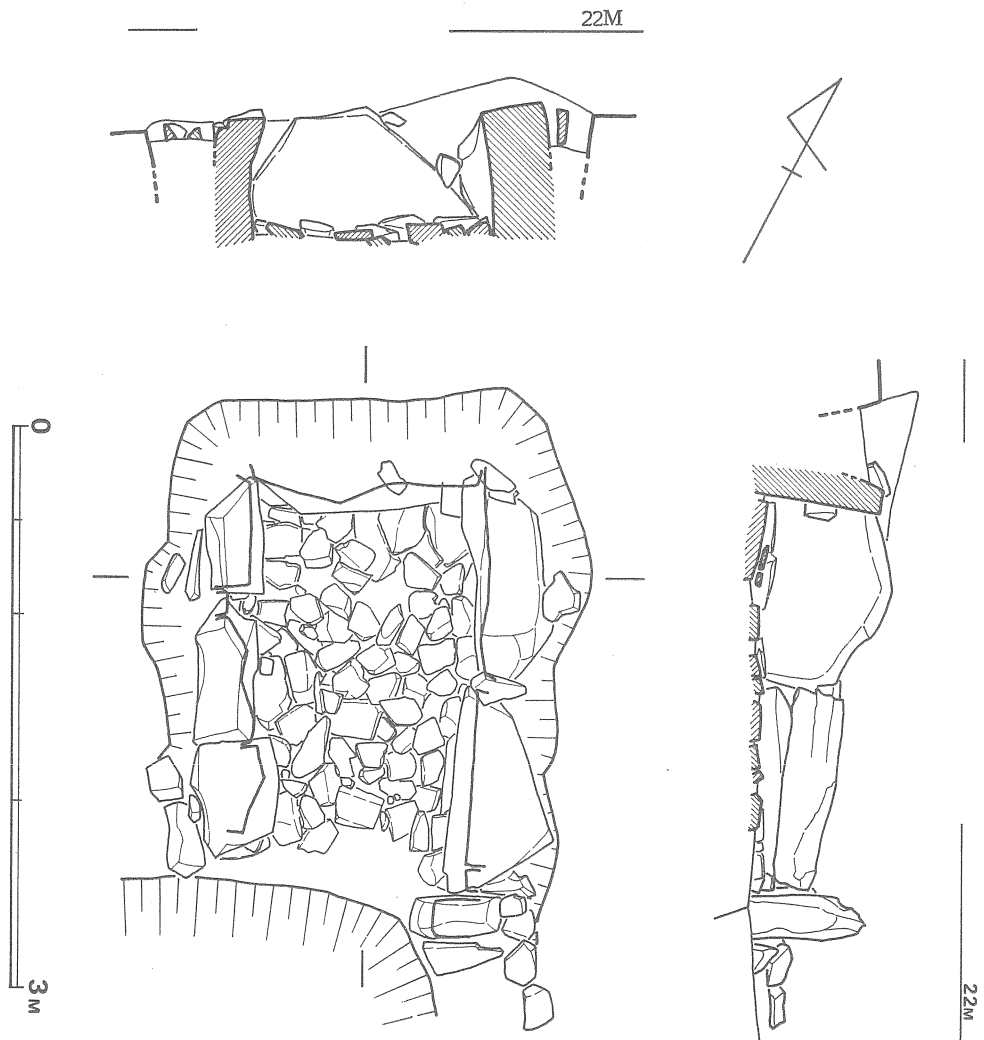
第8図 出土遺物実測図(2・11・13は土師器、他は須恵器)

沈線と、内面にシボリが認められる。残存高7.7mである。

(4) 4号墳 (第9図図版2)

古墳群中最も低い位置に立地する円墳である。四方を造成により破壊をうけ、主体部も陥没していた。墳丘は、約40cm程の盛土が認められた。径約8.3mの円墳と推定される。主体部は横穴式石室で、下部が残存していた。床面には扁平な石を敷きつめている。奥壁は三角形の一枚石を使用し、東壁は2列、西壁は3列の腰石を並べている。東に玄関の石が残っている。

石室の内法は巾約1.3m、奥行き約2.2mである。遺物は全くなく、主体部埋土中かう中世瓦



第9図 第4号墳石室実測図

器碗の破片が発見されたのみである。

以上が新津古墳群のあらましである。各古墳とも相当の破壊を受けていて、遺物も紛失してしまっている。発見された遺物によって、当古墳群は、6世紀後半に営まれたものであることがわかる。また、2号墳を中心とした単一集団の古墳群である。

調査は、諸種の事情から極めて短期間に完了しなければならず、粗雑な調査に終わった。ただかってここに、新津古墳群が営まれていたことを記録に止める。



1. 新津古墳群遠影



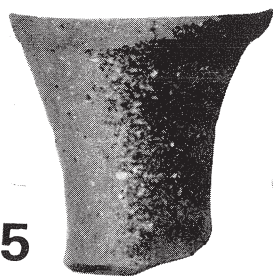
2. 新津古墳群近影



1. 第4号墳石室



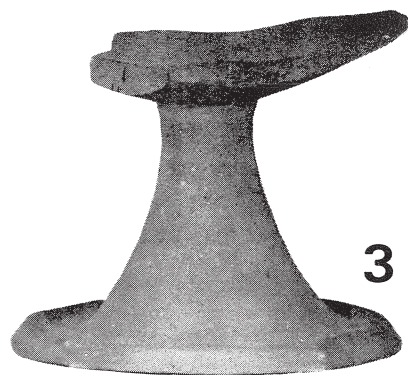
2. 第4号墳石室



5



8



3



6



13



10



12

出土遺物
(第8図は数字に合う)

新 津 古 墳 群

苜田町文化財調査報告書

昭和51年3月31日

発行 苜田町教育委員会
福岡県京都郡苜田町富久町1

印刷 ヤマネ印刷

